

「魔法のダイアリー」プロジェクト 最終成果報告書

報告者：中川宣子 所属：京都教育大学附属特別支援学校

記録日：2019年2月2日

キーワード：自閉症、教育支援連携

【対象児の情報】

◎学年 小学部3年生

◎障害と困難の内容：

障害：知的障がいを伴う自閉症

《S—M 社会生活能力検査》

社会生活年齢（SA）：3歳3ヶ月 集団参加：2歳6ヶ月 身辺自立：4歳4ヶ月

自己統制：3歳8ヶ月 コミュニケーション：2歳7ヶ月 （昨年11月実施）

困難の内容：

- ・「赤い△・青い○」等二つの概念を理解したり、物の名前を言葉で言ったり、文字を読めたりすることが出来るが、自発的な言葉が少ない。
- ・表出言語は僅かな単語程度。
（例）「トイレ」「食べない」「かきくけこ」の自発的な言語はある。
「おはよう」と声をかけられた時に「おはよう」と答える。
「お名前は？」と尋ねられて「自分の名前」を答える。
カードの絵を見て「りんご」「くつ」等物の名前を答える。
- ・給食準備やイスの片付け等日常的に繰り返す活動は、自分から動くことができるが、多くの学習場面で、おそらく理解しているであろう活動においても、なかなか自分から動き出す様子が見られなかったり、興味関心を示す様子が見られなかったりする。
- ・自ら、友達や教師に関わりを求めることが少ない。
- ・対象児の思いや考えを、保護者も教師も、今より少しでも引き出したいと願っている。

【活動目的】

◎ねらい

- (1) 教師や保護者の支援を得ながら、自分の興味関心のあることや頑張っていること等を、相手に伝える経験をする。
→教師や保護者が撮影した写真や動画に興味関心を持ち視聴したり、自分から画面を操作したりする。
- (2) ICT を活用して自分のことを伝え、伝えた内容が相手に伝わる経験をする。
→映像を指さしたり、映像の画面が変わるごとに表情やしぐさを変えたりして相手に伝える。
- (3) 伝えたいという思いを抱き、しぐさや表情、つぶやき等で相手に伝えられるようになる。
→興味・関心のあることを自分から伝えられるようになる。友達や教師、保護者に「伝わる」を実感することで、「伝えたい」という思いを高める。

◎実施期間： 2018年5月～現在

◎実施者：中川、他小学部7名

◎実施者と対象児の関係：対象児Aさんの担任（B先生）、クラス補助等（中川、他6名）

【活動内容と対象児の変化】

◎対象児の事前の状況

(学習への参加、興味関心)

- ・担任 B 先生が授業の説明をしている場面では、具体物を使って興味関心を引こうとしているが、A さんが身体を前に向けることはなく、興味関心を示す様子はなかなか見られにくい。そのため補助の教師 C 先生が、説明に注目するよう、A さんに声掛けをして活動を促している。



〈A さんの授業の様子〉

(言語)

- ・自分からつぶやいたり、要求を示したり、話すことが少ない。
- ・設定された場面での「挨拶（いただきます・さようなら）」や、「号令」などを発表するが、その際の声はささやくように小さく、表情も硬いことが多い。

◎活動の具体的内容

①「デジタル連絡帳アプリ」を活用した「朝の会：お家見よう！」の取り組み

- ・「朝の会」の時に、A 児やクラスの児童の保護者が記録した家庭での様子全員分を、順番に TV モニターに映し、A 児を含むクラス全員で視聴した。(5 月～1 月ほぼ毎日 計 95 回)
- ・クラス皆で、昨日の家庭での様子を視聴しながら、「お手伝い頑張ったね」「猫に会ったの？かわいいね」「お買い物行ったんだ、塗り絵買ったん？」というように、教師と子供、子供と子供、教師と教師とで会話し、コミュニケーションを行った。



〈朝の会「お家見よう」の様子〉

②A さんの情報（興味関心等）を保護者と教師で収集し、関与者皆で共有する取り組み

- ・A さんの興味関心のあること、頑張っていることについての情報を教師と保護者とで映像によって収集し、その収集した情報を、担任教師 B、補助教師 C、A さん保護者、A さん家族、他クラス教師、管理職と、皆で共有し合い、A さんへの理解を深めた。

〈家庭から送られてきた写真や動画〉



③A さんの画像（写真・動画）の視聴への取り組み

- ・A さんが ICT 機器を身近に使う道具として活用できるように、学校 iPad、家庭スマホとタブレットを置き、学習・生活環境を作った。
- ・保護者が記録した A 児の家庭での様子や教師が記録した学校での学習の様子を、A 児が休み時間にタブレットで視聴した。(ほぼ週 1 回 計 25 回)

〈iPad で映像を見る A さん〉



④A さんに対する教師、保護者の共感から、A さんへの働きかけを増やす取り組み

- ・家庭では保護者が、学校では教師や友達が、A さんが映っている映像を一緒に見ながら A さんに共感し、A さんを褒めたり、言葉かけをしたりした。
- ・A さんが映像を見ながら頷いたり、注視したりする様子に着目し、A さんの変容が見られた時には、教師・保護者間、教師間でその様子を共有した。

◎対象児の変化

(映像への興味関心)

- ・A さんは iPad に映る映像に興味関心を示した。
- ・一つの写真(自分が描いた絵)を 10 分程継続して見つめたり自分で iPad の画面を動かすようになった。
- ・iPad の映像は一人で黙って見続けていた。この間、A さんのつぶやきや表情の変化は見られなかった。
- ・クラス全体皆で映像を見る場面では、TV 画面の方に視線を向けるようになった。教師が声掛け等の促しをしなくても、自分から TV 画面を見るようになった。
- ・自分や友達の家庭学習の様子を映像で見て、自分から指差したり、映像の中の物や人の名前をつぶやいたりするようになった。

〈朝の会「お家見よう」の様子〉



(学習への参加、興味関心)

- ・授業の説明時に、皆と同じ物に注目するようになった。
- ・自ら学習活動に取り組む姿が見られるようになった。

(言語)

- ・決まった言葉(例:挨拶、名前等)を発表する声が大きくなった。
- ・「シルバニア」「お風呂」「掃除」「スポンジ」「石鹸」「うさぎ」「友達の名前」「ヘルパーさんの名前」「お父さん」「お母さん」「車」「公園」「はみがき」「磨く」「ペルシャ猫」「ねずみ」「しま猫」「きのこ」「お家」等多数の発語が見られるようになった。

(発語は「問いかけに答える形」と「自発的に呟く」の2つがあった。)

【報告者の気づきとエビデンス】

◎主観的気づき

- ・『ICT を活用した情報共有』→これまで捉えにくかった A 児の興味関心事について、「デジタル連絡帳アプリ」によって学校と家庭が繋がることで情報共有できるようになった。教師間でも A 児についての情報が共有でき理解が深まったことで、日々の授業や指導方法に教師(複数)が活かすようになったことが、A 児の授業参加を促したのではないかと。
- ・『映像を通じて共感』→毎日変化のある映像が A 児の興味関心を持続させたのではないかと。皆で視聴することによって、教師や友達と共感できたのではないかと。映像を見ながら、A 児は「面白い→皆と一緒に面白いと感じている→伝わった→もっと伝えたい」と思えたのではないかと。これらの経験が信頼関係を深め安心して活動に参加できるようになったのではないかと。
- ・『伝わる実感が伝える自信に』→皆で映像を見ながら共感する経験を毎日継続することで、A 児は伝わる実感を得るようになり、そのことが伝える自信となり、発表場面でも、声が大きくなったり、表情が柔らかくなったりしたのではないかと。

◎気づきに関するエビデンス

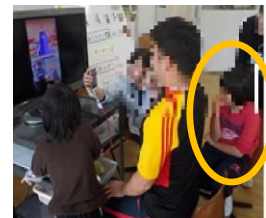
- ・A 児の興味関心事について実施前は当初「絵を描くこと」等の 3 対象しか捉えられていなかったが、「デジタル連絡帳アプリ」を活用することで「ゲーム」「裁縫」「料理」「掃除」等の 23 対象の興味関心事につい

て捉えられるようになった。この事を教師間で情報共有することにより、教師（複数）によるA児への言葉かけが増えた。また各授業でA児の好きなゲームのキャラクター等を使用すると、A児が自分から授業に参加するようになった。

- 映像に対して自分から視線を向けるようになり、次第に指差ししたり、つぶやいたりする様子が見られるようになった。又皆のところへ自分から寄って行き活動に参加するようになった。
- 皆の前で発表する場面では、実施前よりもA児の声が大きくなり表情も柔らかくなった。

◎その他のエピソード

〈Aさんの授業の様子〉



- 遊びに誘うと一緒に遊び笑い出す様子が見られたり、自分から教師の膝に乗ってくるようになったり、友達に手を繋いでいったりする様子も見られるようになった。
- 楽しいことや嬉しいことを、教師とA児で共有、共感できる場面が増えた。
- また同時に、教室内が騒がしいと「うるさい」とつぶやき、気に入らないことがあるとやらない等、嫌な事に対する表現もできるようになってきた。
- Aさんが伝えたいという思いを抱き、しぐさや表情、つぶやき等で相手に伝えられるようになることをねらいとし約一年間、「魔法のダイアリー」の取り組みとして「デジタル連絡帳アプリ」を活用し、Aさんの日常生活の様子や学習の様子を、教師と保護者の協働で毎日継続して記録した。その結果、日頃の何気ないしぐさの中に、Aさんの良さや頑張りを見出し把握することができ、教師間で、或いは教師と保護者間、家族間で、自然にAさんのことを日常的に話題にするようになった。このような周囲の変化が、Aさんの発語やしぐさ、態度の変化、成長にどのように影響したかを、ここで定量的に示すことはできないが、少なくとも教師や保護者は、Aさんのことを今まで以上に受け止め、Aさんに共感し、Aさんと繋がるツールを沢山得たことを実感している。
- 最後に本「魔法のダイアリー」プロジェクトを通じ、子供のコミュニケーション支援の実践に取り組んだ結果、以下の2点について気づいたことを述べる。

それは、私達、教師や保護者から見れば、子供がコミュニケーションに困難を感じていると思い込んでいた節があるが、逆に子供から見れば、「先生やお母さんは、私とのコミュニケーションを困難だと感じているのね。私はいくつもの手段でコミュニケーションしているのに。」と感じているのかもしれないという気づきであった。このことは今回の取り組みで、教師や保護者が、Aさんの得意な事、頑張っている事、好きな事等の情報を得、蓄積されていくにつれて、私達からAさんへの働きかけが増し、つまり教師や保護者のコミュニケーション力が高まり、その結果、Aさんの表情、態度に変化、成長が見られたからである。この事から今後コミュニケーション支援の場合、子供への教育支援だけでなく、子供に対する教師や保護者のコミュニケーションについても考慮していく必要性を実感した。

そしてもう一つの気づきは、Aさんの情報をより効率的・効果的に収集する方法として、担任教師を中心とした複数の教師達と保護者とが連携して情報共有を実践したこと、そしてその際、ICTの活用が非常に便利で有効であったことである。連携、情報共有の大切さは常日頃言われていることであるが、実際の場面ではなかなかできていないことが多い。しかしそれを約一年間、毎日無理なく継続してPCやスマホに記録し、教師間、教師と保護者間で連携、情報共有することのできた「魔法のダイアリー」プロジェクトの実践であった。この実践は、今回のコミュニケーション支援だけでなく、子供達の自立と社会参画に向けた様々な教育支援連携の実践上で役立つことを確信できた。

今後も今回の「魔法のダイアリー」プロジェクトで得た知識と技能を、多くの人達と共有しながら、更に発展させていきたいと思う。